

國學院大學学術情報リポジトリ

地方郷土博物館の観光資源化： 昭和10年代の松本記念館の事例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 窪田, 雅之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000469

地方郷土博物館の観光資源化

—昭和10年代の松本記念館の事例から—

Utilization of the Local Folk Museum as A Tourism Resource: A Case Study of the Matsumoto Memorial Museum in the Showa 10's.

窪田 雅之

KUBOTA Masayuki

はじめに

松本市立博物館の前身は、明治39年（1906）9月21日に松本尋常高等小学校内に開館した明治三十七八年戦役記念館で、後に松本記念館（以下「記念館」と略す。）と館名が変わる。同小学校は明治6年開校の開智学校の後身で、同9年竣工の擬洋風建築校舎は明治13年6月に明治天皇が行幸し、現在は国宝旧開智学校校舎として知られる。筆者は同校舎に保存される学校日誌等を援用して、明治時代後期における地方博物館の誕生、また同館が教育陳列場から郷土博物館へ移行する状況について明らかにしてみた⁽¹⁾。学校日誌は『史料開智学校』⁽²⁾1巻から3巻に採録され、1巻は明治19年から同41年まで、2巻は明治42年から大正11年（1922）まで、3巻は大正12年から昭和22（1947）までの「支校日誌」「学校日誌」「校長日誌」「男子部日誌」「女子部日誌」「部校日誌」「尋常小学校日誌」が採録されている。松本市は昭和10年まで一市一校制をとっていて、本校である開智部をはじめ7部校があった。

本稿では、松本記念館が市街地の小学校敷地内から松本城二の丸に移転後に郷土博物館として充実し、さらに館の理念が変化して観光資源化する状況について、そこに至る記念館及び関連のできごとを含め主に学校日誌等を援用して明らかにする。学校日誌の引用は（ ）で示し、『史料開智学校』の巻数のあとの校は「校長日誌」、男は「男子部日誌」、開は「開智部日誌」、開尋は「開智尋常小学校日誌」、開国は「開智国民学校日誌」の略である。なお記念館の表記は、引用資料などには記念館の表記もあるが、本稿では記念館で統一する。

1. 大正末期から昭和初期までの記念館

（1）三村寿八郎小学校長の死

三村寿八郎は明治三十七八年戦役記念館創設のために心血を注いだ松本尋常高等小学校長で、三村は松本市における博物館の祖とされる人物である⁽³⁾。

三村は明治34年に32歳で校長に抜擢され、大正11年に退職するまで在職年数は22年の長きにわたった。在職中は記念館創設をはじめ、校舎内に明治天皇玉座（明治13年明治天皇行幸時の休息室—筆者）跡を保存、乃木（希典—筆者）室を特設、幼稚園の独立と子守教育所の附設など学校運営に類い稀な手腕を発揮した。しかし、三村は在職中に病にかかり、大正11年6.16「校長樋口壽八郎氏六月三日附ヲ以テ小学校令施行規則第二百二十六条第二号前段ニ依リ退職ヲ命ゼ

ラレ」(2巻校p.715)、同時に兼務していた市立女子職業学校長、幼稚園長も退いた。ここに「樋口」とあるのは養子先の姓で、彼は教育界にある限り三村姓を通したことによる。7月になると小学校同窓会は三村の多大な業績を伝えようと樋口先生頌徳会を組織し、三村の胸像を小学校開智部に建設することを決定した。翌12年2.5「横川類吉氏三村壽八郎伝出版ニ就キ協議」(2巻校p.726)とあり、横川は三村の親友で出版事業も頌徳会の事業であった。その後、4.9「一、樋口先生胸像建設地鎮祭 午後二時ヨリ開智部ニ於テ挙行」(3巻校p.26)され、4.20「一、樋口壽八郎先生胸像除幕式 午後一時開智部校庭ニ挙行(略)来賓ニハ鉄水三村壽八郎ノ冊子ヲ頒ツ(略)胸像製作ハ太田南海氏(略)裏ノ銘澤柳政太郎博士ノ選並書」(3巻校pp.26-27)とある。松本出身で成城学園の創設者である澤柳政太郎は三村と深い親交があり、先の「三村壽八郎ノ冊子」にも「我が壽八郎君は尚ほ健康であられたならば、大に働かれる時に退かれといひながら、君の理想や精神は一萬三千の子弟の理想精神となつて居る。世に教育者多いといへとも君くらゐ多くの子弟を養成した者は極めて稀である。これ自分の君を羨ましく思ふ所以である」などと序文を寄せている⁽⁴⁾。7.12「一、樋口先生頌徳会幹事会 午後二時ヨリ(略)多数出席 樋口先生モ亦自ラ席ニ臨ミ謝辞ヲノベラル」(3巻部p.11)と三村の姿を確認できる。しかし、大正15年4月2日、三村は3年の療養を経て58年の生涯を閉じた。1か月後の5.2「一、前校長樋口先生葬儀、午後二時木沢正麟寺境内、学校ハ職員外生徒代表凡百五十名参列、会葬者全部千名ニ垂々トス」(3巻校p.153)と告別式が行われた。三村の胸像は、太平洋戦争中の昭和17年に供出された。しかし、間を置かず代替像の制作が企図され、同20年7.16「一、樋口壽八郎先生寿像ノ代替品作製完了シ、胸像台ト共ニ」(3巻開国p.605)小学校に届けられ、7.27「一、樋口壽八郎先生胸像代替像入魂式 午前九時ヨリ 於音楽室」(同前p.606)とあり、この式には胸像を制作した太田南海も出席している。日誌には続いて「一、父兄懇話会 午後一時半(略)今回ノ懇話会ハ空襲必至ノ形勢ニアルタメ、此点ヲ主要ナル題目トシテ緊急父兄懇話会ヲ開ク」(同前)とある。このような非常時にもかかわらず代替像入魂式が行われたことは、教育界における三村の偉大さを再認識させられる。この胸像は、現在も市立開智小学校の昇降口フロアーに置かれて児童たちを温かく見守っている。

(2) 記念館と小学校の動き

校長日誌、部校日誌には記念館観覧者、資料寄贈の記述もあるが、ここでは記念館の図書資料移管、小学校校舎内の美術室設置、小学校校舎の保存についてふれる。これらの動きは、現在の松本市で展開される生涯学習・文化財保護行政の礎になっている。

ア 図書類の移管と小学校美術室設置

開館時の記念館は、書籍類として旧藩書籍647部6,796冊、新版書籍2,155部12,250冊を所蔵していた⁽⁵⁾。その後も歴史参考品などに比べれば少ないが図書類の寄贈もあり、施設の狭隘化に拍車をかけていた。少しでも状況を改善するためか、大正10年1.30「記念館内図書一万余冊飾棚二個片面戸棚二個ヲ武徳殿(図書館)へ移転 午前八時車五代 人足十人小使(記念館三人武徳殿二人)」(3巻校p.644)と、図書類を武徳殿に移管している。武徳殿は民間の武道教育の場であったが、松本市が有償で施設を取得し図書館として活用する方針を固めた。この施設を松本図書館と称して市長が館長に就き、同年3月から市営図書館が運営を始めた。明治24年

に開智学校の後身松本尋常小学校内に設立された開智書籍館^{しよじやく}を前身とする図書館の所在地はこの武徳殿を含めその後何度か変わっている。現在は国宝旧開智学校校舎のすぐ北に位置し、10分館を擁する松本中央図書館として活動している。

明治26年9月21日から一週間にわたり開智学校（女子部）で松本教育品展覧会が開催された。陳列された教育品は、小学校児童の作品や小学校の教授器械、標本品などであり、全国各地から出品された。この展覧会はその後たびたび開催され、大正13年から小さい花の会主催による子どもの絵展覧会が毎年開催された。これらの展覧会活動の中で注目されるのが、小学校開智部内に設置された記念美術室である⁽⁶⁾。

大正13年2.1「〔貼付〕東宮殿下御成婚記念事業トシテ美術室ヲ作ルタメノ募金通知」（3巻開p.20）とあるように、東宮成婚を記念して美術室が設置されることになる。同年5月に松本市小学校開智部名で作成された『松本美術館設立の趣旨』⁽⁷⁾によれば、「松本市及松本地方の有力識者の間に地方として相当重きをなす美術館を設立したいといふ議が数年以前より話題に上つてゐました」「信州に於ける郷土芸術の粹を蒐めて一般人士の観覧と参考に供し社会教育の一助としたい」などの趣旨がわかる。以後校長日誌、部校日誌に美術室に関わる記述が目立つ。大正13年5.9「一、開智部美術室（将来松本美術館）開創ニツキ松本美術会員ソノ他ニ参加ヲ求メ賛助ヲ乞フ 来ル十七、八両日展覧会開催、出品ヲ依頼ス」（3巻校p.73）、5.17「開智部美術室ヲ一般ノ縦覧ニ供ス 小展覧会開会」（3巻校p.74）などがあり、美術室は5月9日に校内に設置されて郷土作家を中心とした作品が陳列された。美術室の運営は翌14年7.15「美術室委員ノ件開智部美術室ヲ全校ノモノトシ委員ヲ任命ノ件」（3巻校p.121）、7.16「一、美術室委員 従来開智部ニ於テ経営シ来リシ美術室ヲ全校ノ事業トシ委員ヲ委嘱ス」（同前）とあるように、校長が各部に委員を委嘱して組織した委員会や、松本美術会との協議会を通して行われた。その他関連の記述は割愛するが、『大正十三年 記念美術室 記録』⁽⁸⁾には、大正13年1.25美術室を「将来長野縣中央美術館トナス為理想ヲ以テス、ム」⁷と大きな理想が語られ、昭和6年9.25所蔵品を明確にするため「出品ヲ所蔵品トスルタメ出品者ト交渉シテ寄贈ヲ受クルコト」などとある。先の趣旨とこの記録から学校教育はもとより松本地方、長野県内の美術振興をも視野に入れた活動方針がうかがえる。この美術室はその後松本幼稚園に会場を変更して活動を行ったが、昭和10年の一市一校制廃止とともにその活動を終え、「松本美術館」や「長野縣美術館」設立の夢は叶わなかった。その夢が叶うのは約80年後、松本市美術館が開館した平成14年（2002）のことであった。

イ 校舎の保存と明治天皇行幸所開智学校史蹟指定

小学校開智部では明治9年建築の擬洋風校舎が使用されていた。擬洋風校舎の維持について早い時期に否定的な論議が起こっているが、明治末期から大正初期頃にかけて逆に校舎保存の意識が高まることになる。それを象徴するのが、長野県職員が小学校職員を対象に行った講演であった。明治39年9.17県の部長と視学、郡視学が来校して校内を視察後に講堂に職員を集めて講演し、それは「内務省ニテ古社寺ニ保存金ヲ下附シテ永久ニ其保存ヲ計ル如ク学校ノ古クシテ且効績アルモノヲ保存スルノ必要アリトスレハ本校ノ如キハ確カニ其一ナリ吉田松陰ノ松下村塾ト相並ンテ実ニ天下ノ模範タリ自今一層ノ努力セラレンコトヲ望ム」（1巻男p.465）と

いう主旨である。このように県の部長らは明治30年制定の古社寺保存法を引き合いに校舎の保存問題にふれ、さらに吉田松陰の松下村塾を天下の模範とまで言及している。往時、学校校舎の全国画一化が進む中、既に過去のものとなった擬洋風校舎の保存にここまで踏み込んで言及した例はなかったとされる⁽⁹⁾。

その後、大正7年2月長野県は視学・学務主任会議で市町村に対し教育尊重に関し美績と認めるものについて諮問し、答申を受けた⁽¹⁰⁾。松本市は「小学校校舎歴史的威厳」を筆頭に、「松本記念館」「乃木會」など7件を答申している。県への答申は64件で、うち小学校校舎は松本市の1件のみ、通俗教育施設は記念館を含め4件であった。小学校校舎とは小学校開智部校舎のことで、答申に「開智学校ト称スル時畏クモ 先帝陛下御巡幸ノ砌玉座タリシ處ニシテ今尚厳然タリ」などとある。校舎保存の方針が以下にふれることも含め確かなものとなるのは、「先帝陛下御巡幸」が大きく影響していると考えられる⁽¹¹⁾。大正14年度とされる『校舎増築ニ関スル綴』⁽¹²⁾には「開智部ノ処分案（略）二、表校舎（東西ノ棟）ハ保存修理スルコト」として外壁は鉄網コンクリートに改造、外窓は拡大、天井は紙張から板張とあるのに対し、「玉座ノ室ハ外側ヲ改ムルモノノ俣保存スルコト」とある。「表校舎（東西ノ棟）」は南北の棟の誤りであるが、明らかに「先帝陛下御巡幸」の影響が見て取れる。さらにここには「三、記念館ヲ表校舎ニ擴帳スルコト 附記念館モ鉄網コンクリートニ改造スルコト 四、美術室ヲ設クルコト 五、記念館内書籍ノ閲覧ヲモナシ得ルヤウニスルコト」ともある。大正15年9.16「一、開智部ヲ校舎トシテ保存スル適当ナル案如何」（3巻校p.158）、9.18「2、開智部改築ノ様式如何（略）2、開智部ノ改築ハ東西校舎ヲ廢シ之ヲ二階立片側トシテ十六学級収容ノコト 南北校舎ハソノマ、保存シ之ニ特別教室ヲ設クルコト 東体操室ヲ15間12間程度ニ改築スルコト」（同前）とある。ここにある「南北校舎」は明治天皇が行幸した校舎で、「東西校舎」は「南北校舎」に逆L字型の配された教室棟であった。大正期から始まった校舎改築の検討は、昭和3年の教室棟改築で収まりをみせ、「南北校舎」に限れば2階の講堂に板壁を立てて音楽室へと変更した以外はそのまま保存されることになった⁽¹³⁾。現在、国宝指定のこの校舎2階にある「玉座ノ室」は明治天皇御座所という室名で、休憩のために椅子を置き金屏風を立てたという記録をもとに再現し、公開されている。その後、小学校は昭和10年12月25日に明治天皇行幸所開智学校史蹟として文部大臣から指定された。この史蹟指定についてこれ以上ふれないが、校舎の保存とそれに続く文部大臣指定の明治天皇行幸所開智学校史蹟は、文字どおり「先帝陛下御巡幸」の足跡そのものであった。

戦後、昭和23年に開智学校史蹟指定は解除されたが、校舎は翌24年重要美術品の認定を受け、同36年重要文化財に指定、そして令和元年国宝に指定され、松本市では松本城天守に続き2件目の国宝建造物が誕生することになった。

2. 施設の狭隘化と松本市への移管

（1）施設の狭隘化と粗造

大正期に記念館改築の必要性が喚起されたこと、大正8年刊行の『松本記念館』の序文で澤柳政太郎もこのことに言及していることは既にふれた⁽¹⁴⁾。また同14年度とされる記念館の拡

張や鉄網コンクリート改造方針も先のとおりである。

小学校敷地にあった記念館は、昭和3年の小学校改築時に正門側に移転した（写真1）。本町から西に進み正門を入ると、手前に記念館があり、その奥に「南北校舎」、即ち擬洋風校舎が目に入る位置である（写真2）。同年には5項目からなる『松本市小学校校舎増築ニ関スル意見』⁽¹⁵⁾が小学校内でまとめられ、記念館は「三、記念館ハ速ニ鉄筋コンクリートニ改造スルコト、室数ヲ多クシテ美術室、図書閲覧室、事務員室、応接室、宿直室、小使室等ヲ設備スベシ、表校舎ヲ保存セザル場合ハ現今ノ開智部ノ玉座室ハソノ倣コノ建物ノ一室ニ取り入ルベシ」とある。また施設の狭隘化は、『博物館研究』誌上でも松本記念館と題し、館の成り立ちや資料点数にふれ「小学校附設の博物館で、これほどの経歴と内容のあるものは稀有であろう。この際奮つて大拡充を施し、せめて四隣に相当の園池ある防火建築に改め、一つの立派な教育博物館を現出せしめたいものと云はれている」と言及されている⁽¹⁶⁾。

（2）松本市への移管と周年事業

昭和6年6月1日、記念館は小学校附設の施設から松本市役所に移管され、名実ともに松本市立の施設となった。学校日誌に直接の記述は見当たらないが、この移管は記念館の当初の設立理念に変化をもたらすことになる。

この年は記念館開館25周年であった。9月8日に記念館開館満25周年について協議がなされ、当日9.21「一、朝会 記念館満二十五（五 鉛筆ニテ加筆）年記念日及樋口校長慰霊祭ニツキ 一、掃除 校庭、乃木室、作法室 一、樋口前校長慰霊祭 午後三時ヨリ胸像前 胸像前ニ二段ヲ作り、榊ヲ立テ供物、後口ニハ幕ヲハル（略）一、記念講演 公会堂ニテ午後七時ヨリ 中柴少将、斉藤少将ノ話」（3巻部p.243）とあるように、三村前校長の慰霊祭と講演会が行われている。斉藤は斎藤瀏、中柴は中柴末純とともに郷土出身の陸軍少将である。『昭和六年度松本市記念館日誌』⁽¹⁷⁾に9.9「地方博物館としては相当に認めらるゝに到りしも従来内容ハ悉く寄贈品にして経費ハ皆無に候間御帰省下されても物質的の謝礼ハ難攻甚だ恐縮に候へ共郷里指導の為御同情を蒙り御台臨下され候へば幸甚に存じ」と、両者に手紙を出したとある。文

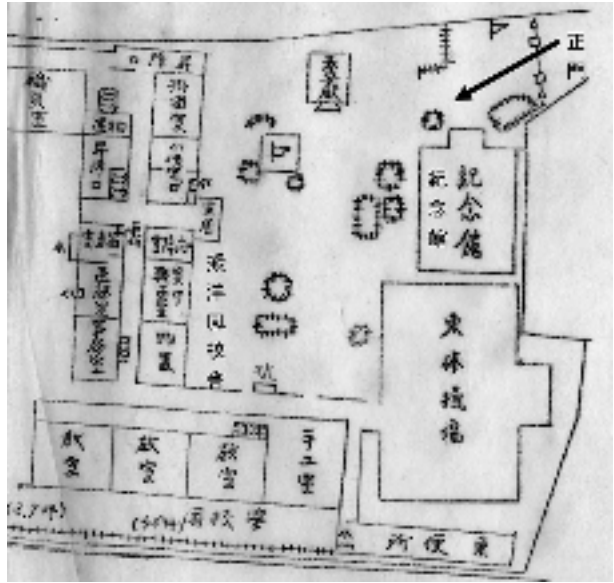


写真1 松本尋常高等小学校開智部平面図（部分・昭和9年9月）（国宝旧開智学校校舎所蔵）



写真2 絵葉書（松本名所）松本記念館（個人所蔵）
手前の記念館に掛かる「明治三十七八年戦役記念館」
額面は現在も大切に保管され、貴重な資料である。

面から財政的に逼迫した状況が伝わるが、当日の慰霊祭は約100人が参加し、夕方7時開始の講演会は約600人が聴講し終了は11時と盛況であった。翌日は関係者が三村前校長の墓参を行った。なお平成11年、松本市は明治39年9月21日の明治三十七八年戦役記念館の開館日にちなみ、9月21日を松本市博物館の日に制定した⁽¹⁸⁾。

(3) 記念館嘱託委員

記念館は狭隘化が問題となる一方、職員や予算面も含め十分な活動を行える状況ではなかった。このような状況を改善するためか、『昭和十一年度松本記念館日誌』に6.15「記念館嘱託委員設置ノ件」とあり（写真3）、記念館は専門家を委員に嘱託することを検討している。先ず「帝国博物館、東京博物館を初め各地方博物館に於ては概ね専任者の外ニ嘱託委員を置」き、「陳列品の内容、陳列品蒐集方法、陳列法、経営方法」を調査研究しているので参考にしたいとある。続いて記念館の嘱託委員は「市内在住、特種の研究技能を有するものを任命」し、年間2、3回の会合、調査を行い、参考として委員に「郷土史研究者 堀内、大熊、松林 文化史研究者 住山、胡桃澤、池上（略）山岳植物研究者河野、矢澤、犬塚 藝術研究者 南海、小穴、胡桃澤、飯田（略）」の名前が記される。胡桃澤は胡桃沢勘内で長野県の民俗学の草分けで、柳田国男・折口信夫・渋沢敬三をはじめ中央の民俗学者や文人と親交があった。彼が収集した資料群は胡桃沢コレクションとして現在松本市立博物館に所蔵される。太田は先にふれた三村寿八郎胸像の制作者太田南海で、米原雲海に師事し日本美術会展二等賞を受賞した彫刻家である。また山岳植物研究者の河野は河野齡藏、矢澤は矢澤米三郎で、両者は大正5年に岩波書店から共著で『日本アルプス登山案内』を刊行するなど国内でも著名な研究者であった。

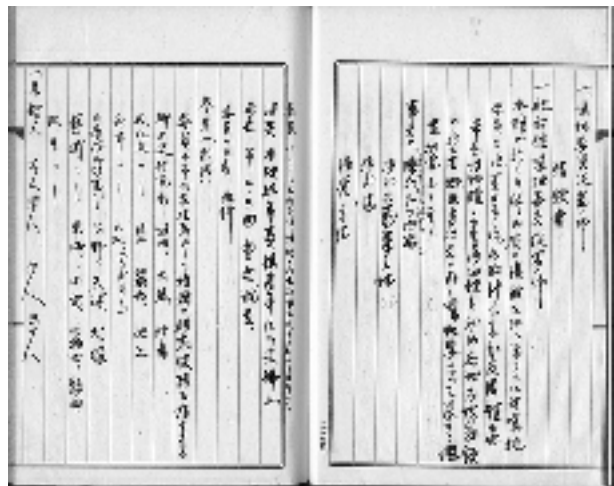


写真3 昭和十一年度松本記念館日誌（松本市立博物館所蔵）
「記念館嘱託委員設置ノ件」について記述される。

ここでは委員の具体的な活動に踏み込まないが、昭和10年代、地方の博物館がいわば研究調査専門員を嘱託し、現在ならば資料収集や展示方法、博物館経営などの調査研究に従事することであり、松本市の博物館史上特筆すべきことである。河野をはじめ「特種の研究技能を有する」研究者への委員嘱託は、戦役参考品を主に陳列する小学校附設の施設が市に移管され、市内外からの多くの観覧者を迎える市立郷土博物館的な施設に姿を変えることと深く関係する。

3. 観光資源化への動き

(1) 松本城二の丸への移転

小学校敷地にあった記念館は、施設の狭隘化や記念館が松本市に移管されたこと、さらに市による松本城周辺の中央公園計画に記念館を移転して拡張する方針などがあり、昭和12年から

翌13年にかけて松本城二の丸にあった松本中学校（松本深志高等学校）の旧校舍に移転することになる。

移転準備の一端を『昭和十二年度松本記念館日誌』からみる。5.30「河野（齡藏一筆者）先生、熊田先生市長と、ロックガーデンに付會談す」、そして7.13「『移轉準備休館』貼紙ヲ為ス」とあるから移転準備が本格的に始まっている。7.14松本市の教育課長が来館し「魚形水雷、爆弾、浮標水雷其他重量アル物品ノ運搬ニ付熊田」と相談、7.17「魚形水雷、浮標水雷其他重大物ノ運搬準備ヲナス午前十時運搬自動車漸ク来リ十時五十分搬出ス」、7.20「朝新館ニテ準備午後旧館へ 清水小学校高等科生徒百五十名来リ二階ノ四列ノ棚ノ物品を運び棚ハ其俣トナル、空ノ棚ハ次回ノ男生徒ニヨリ施行ノ予定 終ッテ新館へ来リロックガーデンニ撒水シテ終ル」、7.26「市青年学校生徒並ニ職員二名来援 松本城模型、アルプス模型、古屋根瓦造り付ケ棚其他雜物ヲ運搬ス」などとある。他の関連記述は割愛するが、移転には市内小学校児童をはじめ市青年学校、女学校や中等学校生徒などの勤労奉仕を受けている。翌13年に『信濃毎日新聞』（昭和13年6月12日付）は松本城天守を中心とする松本市の中央公園計画は具現化されて記念館と図書館が先ずこの一角へ移転し、「記念館は移転を機会として内容の整理刷新を期し、委員を囑託して目下陳列品を系統的に整理中で（略）新たに山岳館を併設し、山岳都市としての面目を発揮する筈で、河野齡藏氏の苦心になるロックガーデンも近く竣工の運びになった」と報じている。

（2）ロックガーデンと山岳室の設置

この時期の大きな特徴は、新聞報道にもあるようにそれまで戦役参考品や郷土資料を中心に陳列していた記念館にロックガーデンが築造され、山岳室が設置されたことである。この二つの事業は記念館囑託委員の河野齡藏が指導にあたった（写真4）。河野は明治28年に松本尋常高等小学校女子部に植物園を設置したのがロックガーデン築造の第一歩で、その後彼の手腕は県外でも発揮された。昭和8年に栃木県那須の皇族李王家別邸にロックガーデンもその一つである。翌9年には李垠が松本の河野邸を訪れてロックガーデンを鑑賞している。ロックガーデンの第1期工事は昭和13年4月下旬から7月上旬にかけて行われ（写真5）、山岳室はロックガーデンが



写真4 河野齡藏（松本市立博物館所蔵）



写真5 記念館のロックガーデン（リポジトリ河野齡藏所蔵）

手前に池があり、河野は左から2人目の人物である。

ほぼ完成した時期に設置が行われた（写真6）。河野がロックガーデン築造に臨む姿は、「先生は畢生の快事業と快諾せられ」「先生は実に七十四才の高齢を以てその炎天下に些の厭ひもなく心血を注がれた」、そして「先生は此のロックガーデン築造が縁となつて常に記念館に出入せらるゝにつれ、自然その内容の貧弱や経営の困難なり事情も知悉せられ、非常に同情を寄せられたのである。遂には記念館を全く我が物としてその完成に助力された」と河野の元同僚で当時記念館勤務の熊田隆は回想している



写真6 記念館の山岳室（松本市立博物館所蔵）
羚羊の剥製、「信州産鳥類」の木札などが写るので第一山岳室と思われる。

⁽¹⁹⁾。河野はロックガーデン第2期工事中の昭和14年4月に75歳で亡くなり工事は一時中断したが、河野の遺志を継いだ信濃山岳会や松本博物同好会の努力で、2か月後の6月に完成した。河野は新生記念館のために老齡、多忙を顧みず献身的に行動した学者・教育者で、博物館中興の祖とされる人物である。

河野はその生涯で12か所のロックガーデン築造に関わった。しかし、管見による限り松本市内の河野邸のそれを除けば、現存するものは昭和12年に完成した松本第二中学校（松本県ヶ丘高等学校）のロックガーデンだけで、現在も同校のロックガーデンは築山が当初のまま三つ残りほぼ往時の姿を保っている。同校のロックガーデン築造の担当は博物学教諭の山崎林治で、当時72歳であった河野の仕事ぶりを「『何をおいても行つてやろう』との事であつた。『之も僕の道楽で』と、確か其年にはロックガーデンでは松本記念館にも富士見高原療養所にも（略）手をつけられて居られた（略）朝早くから見えて（略）吾々のお手伝する暇もない程に先生は一本々々山を上つたり下つたりして御自分でなさる勢力には唯々感動せざるを得なかつた程」と回想している⁽²⁰⁾。

4. 記念館理念の変化—観光資源化とその理由

（1）理念の変化

松本城二の丸に移転した記念館は、昭和13年9月17日に開館した（写真7）。従来無料であった観覧料は1人10銭とし、松本城天守も1人10銭で、共通観覧する場合は1人15銭と割引料金として共通観覧券を発行している（写真8）。

新生記念館の概要を松本市役所が作成した『松本記念館（郷土博物館）案内』⁽²¹⁾



写真7 二の丸に開館した記念館（松本市立博物館所蔵）
「松本記念館」の表札が掛かり、手前から自動車で運んだ「魚形水雷、浮標水雷」、野砲が屋外陳列される。

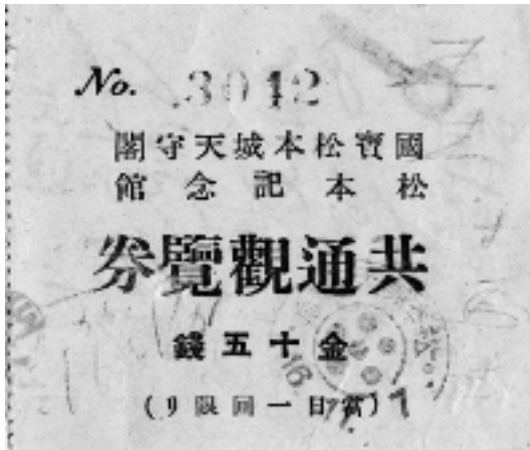


写真8 国宝松本城天守閣松本記念館
共通観覧券（松本市立博物館所蔵）
「金十五銭（当日一回限り）」とある。

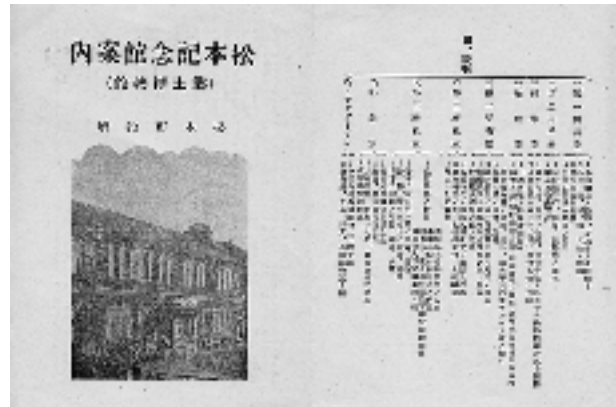


写真9・1 『松本記念館（郷土博物館）案内』
（松本市立博物館所蔵）

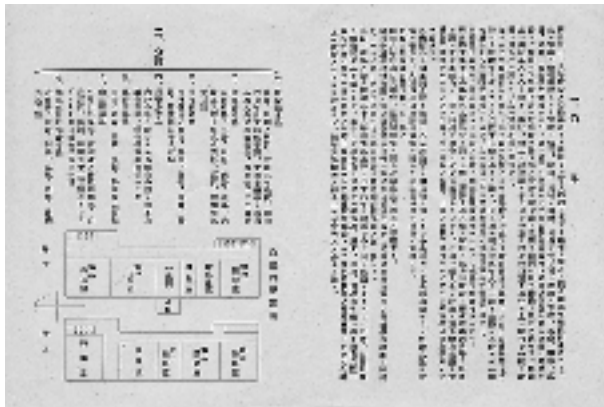


写真9・2

（写真9）からみてみる。館内配置は1階に戦役記念室、新収品室、第一・第二山岳室、事務室、2階に第一・第二・第三歴史室、地理室、科学室があり、館外にロックガーデンが築造された。資料分類は①戦役記念品②歴史参考品③地理参考品④科学参考品⑤芸術関係品⑥山岳関係品⑦郷土文化研究参考品の7分類で、これに拠って資料が各室に陳列された（表1）。それより前『信濃民報』（昭和13年8月31日付）は「今回の移轉陳列に仍つて蒐集品の科学的な分類が完成された関係から、従来と同じ陳列品と雖も著しく光彩を添へた事」と科学的分類方法に拠ったこと、そして「矢澤河野両氏の収集品を基礎にして新たに山岳室二室が設けられたのと、更に北アルプスの自然木石を配置した雷鳥、カモシカ等の生態陳列は必ず観覧者の驚嘆措く能はざるものと期待されてゐる」と矢澤米三郎と河野の

表1 記念館の室名と主な陳列資料

室名など	主な陳列資料
戦役記念室	1 明治天皇御巡幸記念品 2 日清、日露戦役記念品 3 大正三年、昭和六七年、日支事変記念品 4 支那事変記念品
第一山岳室	1 中部山岳ノ動物、夏及冬ノ生態標本 2 羚羊、鹿、猪、熊、其他ノ獣類 3 信州産鳥類剥製 4 中部山岳国立公園ノ模型
第二山岳室	1 長野県岩石、地質、鉱物等ノ標本 2 山岳及登山写真
第一歴史室	1 福島大将ノ遺物、写真 2 幕末勤王ノ志士近藤茂左衛門兄弟ノ遺品 3 樋橋戦争ニ戦死セル吉江伴之丞ノ胴衣 4 神通艦長水城大佐ノ遺品
第二歴史室	1 石器時代ノ縄文式弥生式土器及石器 2 原史時代ノ瓦、古墳出土物、古墳模型 3 郷土文化史資料
第三歴史室	1 皇室関係ノ御物 ・英照皇太后御使用ノ人形 ・中山二位局御使用ノ角盥 ・朝香宮、東久邇宮兩殿下御登山御用品 ・御即位大嘗宮御上棟ノ槌 2 乃木、大山兩大将ノ遺書、遺物 3 沖、脇、横川三志士ノ遺物、写真 4 日本及韓国ノ甲冑、武器、武具
地理室	1 日本各地ノ特殊産業標本 2 樺太、台湾、朝鮮、満州、志那、南洋各地ノ風俗、産業標本及模型800種
科学室	1 日本内地、南洋、台湾、熱帯各地ノ珍奇ナル動物標本194種 2 植物腊葉（172種）、鉱物其他800種
ロックガーデン	1 中部山岳高山植物240種 2 北海道、千島、樺太、高山植物30種

註（21）を改編

役割を強調している。そして「記念館では郷土博物館としての使命達成のため、各委員が部門毎に分担して郷土の写真、図絵、表計等を作製する方針」と記念館嘱託委員の任務にもふれている。

明治39年開館の明治三十七八年戦役記念館、そして移転前の記念館の資料分類は器械標本と書籍を除くと、主に①戦役参考品②歴史参考品③風俗参考品④地理参考品の4分類であった。これらに一貫していた理念は、主に小学校児童を対象とした教育と児童を含め市民、外来者を対象とした忠君愛国・国威発揚で、あくまでも小学校附設の施設として当時の学校教育の延長線上に位置するものであった。しかし、小学校児童から離れて松本城二の丸へ移転したこと、無料から有料観覧になったこと、先にふれた館案内に（郷土博物館）とカッコで付けたこと、資料分類は4分類から科学的な方法に拠る7分類になったことなどを踏まえれば、記念館の理念は明確に変化したことになる。このように記念館の内外をめぐる環境は大きく変化し、記念館は松本城天守と同様に松本市の名所にとの観光資源化の動きがあったといえよう。

既に大正8年刊行の『松本記念館』の序で市長小里頼永が「今や松本ニ遊ブ者ノ必ズ足ヲ止ムルハ記念館ナリ」「實ニ我が市ノ誇トスル所ナリ」と述べ、昭和10年発行の松本市観光地図に25か所の名所旧跡が朱色で図示され、そこには松本城や移転前の「記念館」も図示されている。松本城天守は昭和6年に天守閣観覧規定が定められて有料観覧が始まり、同11年に国宝保存法により国宝に指定されていた。『信濃民報』（昭和13年10月4日付）は「記念館賑ふ 開館以来七百四十五人」との見出しで、「新装なつた松本市記念館は、去る九月十七日開館されたが、開館第一日には二十三人、二圓二十五銭の参観人があつた。二日は神道祭（四柱神社の祭礼一筆者）のこと、て開館以来の最高を示し、二百三人、十三圓二十四銭であつた」と報じている。さらに同紙（昭和13年12月4日付）は「天守閣観覧者増加 記念館入館者も漸次増加」との見出しで、松本城天守の11月中の観覧者は2,519人で去年同期比610人増、記念館の同月中の観覧者は841人で、うち天守への共通観覧者は384人などと報じている。両施設の共通観覧（制度）は主に観光客対象と思われ、記念館は社会教育施設に加え観光施設としての性格も併せ持つようになった。このように記念館の理念が変化した理由はどのようなものであったのか。

（2）理念変化の理由

記念館の理念が変化した理由を次の2点にまとめてみた。1点は時代の経過とともに一般市民から郷土関係の寄贈資料が増加し、陳列内容をはじめ記念館の在り方が設立当初の理念から離れ始めたことと考える。当初は文字どおり明治三十七八年戦役関係の資料を中心に陳列していたが、その後当然戦利品も寄贈されているが、むしろ河野や矢澤らが自ら収集した資料群を寄贈し、自然資料も含め戦役関係以外の資料が増加している。昭和12年現在の記念館の所蔵資料概要は、写真・書画を含めた戦役記念品（戦利品資料）2,359点に対し、中国大陆・欧米を含めた地歴参考品（考古・歴史・民俗・民族資料）7,913点、博物標本4,753点の小計12,666点であった⁽²²⁾。この状況は、記念館という館名では施設の性格が理解されにくく、むしろ郷土博物館という館名がふさわしい資料が集積されたことを示している。先にふれたように館案内にカッコで（郷土博物館）と付たこともうなずける。

もう1点は記念館移転前後の松本地方の観光振興の動きと関連があると考えられる。松本は古代

から四通八達の地で、江戸時代に城下町として繁栄した。明治を迎えると松本は商都と呼ばれるほど経済的活況を呈している。明治35年に国鉄篠ノ井線が開通し、大正5年には松本と大町を結ぶ信濃鉄道（現JR大糸線）が開通するなど交通環境は大きく変化した。往時、上高地が観光面から次第にスポットが当たり始め、北アルプスへの登山者も毎夏増加しており、大正9年に松本と島々を結ぶ筑摩鉄道（現アルピコ交通上高地線）が開通した。この鉄道は沿線住民のみならず多くのアルピニストから利用されている。昭和2年に大阪毎日新聞ほかが主催し鉄道省が公認した日本新八景に上高地溪谷が選定され、翌3年には上高地一帯が国の名勝天然記念物に指定されるなど上高地の大衆化に大きな影響を与えた。同8年には松本観光協会が発足した。会長に小里頼永市長が就任し、対象となる地域は北アルプスをひかえる南・北安曇郡、松本市、東筑摩郡の1市3郡であった。関東・関西圏の大都市をはじめ、全国の主要都市や各駅に観光ポスター、パンフレット類を配布して松本地方への誘客に努めている。翌9年には上高地を含む北アルプス一帯が中部山岳国立公園に指定された。このような北アルプス、上高地をめぐる観光的な魅力の周知や松本観光協会の宣伝活動は、山岳都市ともいわれる松本市の記念館にも影響を与えたのであろう。ロックガーデン築造と山岳室設置がそれであり、記念館の理念を変化させる追い風になったと考える。ロックガーデンと山岳室は観光資源としての記念館の付加価値をより高めたのであろう。

移転開館前日の『信濃毎日新聞』（昭和13年9月16日付）は、記念館は「山岳室二室に特に力を入れて資料の収集に當り（略）河野齡藏氏が畢生の努力を傾けたもので、ロックガーデンと相俟つて松本名所の一つとなる筈である」と報じている。昭和13年以降の作成とされる8枚1組の松本名勝という絵葉書セットがある。それぞれに観光都市・松本と印刷され、うち1枚は記念館で「眞晝に映えて 松本城天守閣前に松本記念館が建てられてある。實に宏壮な大建築になり、館内には地歴、風俗、科学等に関するものが数多く陳列されてあり、一般に公開されてゐる」とある（写真10）。他の絵葉書は、松本城天守閣、城山公園、長野県護国神社、松本高等学校、県営運動場、県社筑摩神社、四柱神社で、いずれも往時松本市内の代表的な観光名所であった。

記念館が新たに開館した翌年、昭和14年現在長野県には教育的観覧施設が10館園存在していた⁽²³⁾（表2）。立地条件や施設規模にもよるが、寺院宝物館や小諸児童公演遊園地（現小諸市動物園）を除けば、現在活動しているのは記念館の後身・松本市立博物館と上田徴古館の後身・上田市立博物館の2館である。

2館とも城跡に位置し、いわゆる歴史資料が陳列され、かつ松本駅・上田駅からそれほど離れていない距離に所在し、市民はもとより観光客も観覧しやすい立地条件であった。小諸児童公演遊園地は記念館や上田徴古館と施設の性格は異なるが、観光客が訪れる小諸城跡を公園にした懷古園内に



写真10 松本名勝絵葉書「眞晝に映えて」（個人所蔵）

地方郷土博物館の観光資源化

表2 昭和14年の長野県内の教育的観覧施設

項目	名 称	設立者別	所 在 地	設立年月	昭和14年度 予算(円)	陳列品の種類 並に点数	13年度 観覧 延人員	13年度 開館 日数	職員数	管理者
1	往生寺宝物館	私立	長野市西長野	明治19年8月	—	仏像、仏具、書画17点	7,505	365	—	水野善凱
2	松本市記念館	市立	松本市〔二の丸町〕	明治39年9月	1,793	歴史考古資料、博物に関するもの等 17,175点	12,235	278	3	松本市
3	大勲進宝物館	私立	長野市箱清水	明治41年3月	—	仏像、仏具、書画141点	40,626	365	—	松本久雄
4	大本願宝物館	私立	長野市元善町	明治44年5月	—	仏像、仏具、書画148点	792,419	366	2	中村禮三
5	諏訪徴古館	私立	諏訪郡中州村高島神社内〔諏訪市〕	大正6年10月	—	考古資料、教育参考品等 501点	1,600	365	—	諏訪頼固
6	官幣大社諏訪神社宝物館	私立	諏訪郡中州村〔諏訪市〕	大正8年4月	—	歴史考古資料その他 213点	2,332	365	—	諏訪神社
7	小諸公園児童遊園地〔動物園〕	町立	北佐久郡小諸町〔小諸市〕	大正15年3月	2,215	鳥獣類 135点	32,000	365	2	小諸町
8	福島町記念館	町立	西筑摩郡福島町〔木曾郡木曽町〕	昭和2年10月	15	歴史資料 121点	120	235	—	福島町
9	上田市徴古館	市立	上田市上田城槽内	昭和4年7月	504	歴史資料 312点	3,342	301	1	上田市
10	上諏訪町水族館	町立	諏訪郡上諏訪町〔諏訪市〕	昭和6年8月	250	諏訪湖産淡水魚 30種	60,000	200	—	上諏訪町

註(23)を改編 []内は筆者

所在していた。既にふれたように⁽²⁴⁾、観覧者のいない博物館は存在し得ず、記念館も日露戦争戦勝記念という性格や観光客が多く登閣する松本城天守に隣接するという立地条件の良さゆえに多くの観覧者があったのである。だとすれば市民をはじめ観光客も来館しやすい立地条件や観覧したくなる陳列内容は博物館存続の要因の一つであろう。

おわりに

昭和10年代に、明治39年開館の松本記念館が移転を機に郷土博物館として充実し、時間の経過とともに当初の設立理念が変化して松本市の観光資源化する状況について学校日誌等を援用して述べてみた。

移転後の記念館が開館した翌年、昭和14年作成の『昭和十四年度松本市学事概覧』に記念館は次のように記載されている。記念館の所蔵資料は日清、日露戦争以後の戦役記念品をはじめ主に地方色豊かな考古学、歴史、地理、科学分野にわたり、現在の点数は約1万8千点の多数になっている。そして「純然タル郷土博物館ニシテ社会教育施設トシテ又教育ノ補助機関トシテ文化向上ニ貢献スルトコロ」が少なくなく、観覧者年間3万人を超えしかも年々増加傾向にあり、13年に新たに「山岳部ヲ加ヘ山岳関係品及地方産ノ動植物ヲ陳列シ『ロックガーデン』ヲ築造」し、これに高山植物を植栽して多数の観覧者を「歓迎スル当市ニ於ケル唯一ノ施設名物」になったとある。松本市は、記念館は先ずは郷土博物館として社会教育と文化向上に資する施設であり、次にさらに多数の観覧者を「歓迎スル」松本市唯一の施設名物、即ち観光資源であると位置付けて紹介している。

翌15年に松本市歌が発表された。唱歌故郷の作詞者高野辰之が作歌し、歌詞の1番に「日本アルプス筑摩連峰 繋ぐ平野の松本市こそ山色水光世に麗はしく 宜なり観光都市の名高き」、2番に「五層閣上見渡す限 四郊は沃野 交通至便」、3番に「伸びよ松本 栄えよ吾が市 宜しく学都と呼ぶべき此処に」などとある。市歌の歌詞に北アルプスをはじめ四囲を山々に囲まれた観光都市であり、交通至便の地であり、学都とあるのは、長野県出身の高野ゆえに松本市の立地や現況についてある程度認識があったとも考える。大正8年設立の松本高等学校には

山に憧れた学生が全国から入学し、青春を謳歌した。このような立地条件からすれば、記念館が松本市の観光資源化したこともうなずける。博物館の性格はその立地条件と深く関連し、立地条件によってはいくつかの性格を併せ持つものである。往時、多くの外来者、観光客が記念館で陳列資料などを通して松本の魅力にふれた可能性は大きかったのではないか。逆に外来者が注目することによって、今まで余り関心を寄せなかった市民が注目する場合もあったのではないか。令和元年（2019）のことであるが、旧開智学校校舎が国宝に指定された影響は大きく、元年度の同校舎の観覧者数は前年度比49.5%増の136,289人であった。居住地別の統計資料はないが、観光客の来館に影響をうけて来館、観覧した市民が予想以上に多かった事例がある⁽²⁵⁾。

現在、令和5年秋の開館を予定し、松本市が世界水準の歴史観光エリアを目指す松本城三の丸内に松本市基幹博物館の建設工事が進行している。新博物館の機能は、従来の①収集・保存②調査・研究③展示・学習支援に新たに④交流・情報交換⑤集客・観光を加え、5機能としている。新たな2機能は松本市のまちづくりとも密接に関連するものであり、新博物館は、先ずは市民の生涯学習の拠点であり、次に地域の観光関係者と連携し、文化資源＝観光資源の紹介や積極的に情報発信する施設である性格を併せ持つと考える。市民が博物館に来館して資料にふれ、学び、そこから派生した様々な営みが松本のまちに元気を与えて賑わいを創り出し、観光振興につながると考える。だとすれば、小学校敷地から移転した記念館がそうであったように、二の丸から三の丸に移転を機に新博物館も松本市の博物館開館200年を見据えて新たな博物館活動を展開するものと期待したい。

本稿を成すにあたり、多くのご教示をいただいた国宝旧開智学校学芸員の遠藤正教さん、ご協力をいただいた松本市文化課主任の百瀬将明さん、松本市中央図書館司書の丸山和子さんに心からお礼を申しあげる。

註

- (1) a. 窪田雅之 2020 「明治後期における地方博物館の誕生—松本尋常高等小学校日誌類の記述を中心に—」『國學院大學博物館學紀要』44輯 pp.1-18、b.同 2021 「教育陳列場から郷土博物館への移行—松本尋常高等小学校明治三十七八年戦役記念館の事例から—」『國學院大學博物館學紀要』45輯 pp.1-17
- (2) 『史料開智学校』全21巻は旧開智学校資料集刊行委員会が編集し、1988年から97年まで電算出版企画が刊行した。
- (3) 窪田雅之 2018『信州松本発。博物館ノート—地域博物館でのささやかな試みと実践』pp.69-79
- (4) 横川類吉 1923『鐵水 三村壽八郎』
- (5) 官報7050号 明治39年12月27日付
- (6) 重要文化財旧開智学校校舎 2015『開智学校の教育』pp.60-61
- (7) 国宝旧開智学校校舎所蔵
- (8) 国宝旧開智学校校舎所蔵
- (9) 松本市教育委員会 2018『重要文化財旧開智学校校舎 調査研究報告書』pp.121-123

- (10) 長野県内務部学務課 1917『教育尊重ニ関スル美績調査』
- (11) 窪田雅之 2021「国宝旧開智学校校舎の来し方・現在・今後の展望について―市民の学びと観光振興に寄与する博物館の視点から―」青木豊先生古稀記念発起人会編『21世紀の博物館学・考古学』雄山閣 pp.345-354
- (12) 国宝旧開智学校校舎所蔵
- (13) 註9に同じ
- (14) 註1bに同じ
- (15) 国宝旧開智学校校舎所蔵
- (16) 日本博物館協会 1935「松本記念館」『博物館研究』8巻9号
- (17) 松本市立博物館所蔵 以下引用する記念館日誌は松本市立博物館所蔵
- (18) 窪田雅之 1999「松本を『まるごと』博物館に―松本市博物館の日制定によせて」『あなたと博物館』104号 のち註3に収載
- (19) 熊田隆 1939「河野先生と松本記念館」『信濃教育』635号 pp.26-29
- (20) 山崎林治 1938「ロックガーデンに就いて」『松本第二中学校校友』11号 pp.15-18
- (21) 松本市立博物館所蔵
- (22) 松本記念館 1937『松本記念館』
- (23) 文部省社会教育局 1939『教育的観覧施設一覧 昭和十四年四月一日現在』
- (24) 註1bに同じ
- (25) 註11に同じ

文献

- 松本市 1933『松本市史下巻』
- 山崎公雄編 1936『昭和十一年五月 松本市制三十年記念誌』信濃出版協会
- 長野県 1990『長野県史通史編第9巻近代3』
- 有賀義人 1991『松本平近代100年の軌跡（上）』銀河書房
- 松本市 1995『松本市史第二巻歴史編Ⅲ近代』
- 松本市立博物館 2007『松本市100彩―来し方 そして未来へ―』
- 窪田雅之監修 2009『信州松本絵葉書集成』書肆秋櫻舎
- 松本市立博物館 2013『ダルマの人 百瀬正堂―第3代松本市長のまなざし―』
- 窪田雅之編著 2013『近代松本地図集成』書肆秋櫻舎
- 松本市立博物館 2015『河野齡藏―博物学者のProfile―』
- 松本市・松本市教育委員会 2017『松本市基幹博物館建設計画』

(松本市立博物館分館 重要文化財馬場家住宅館長)